

栄養教諭を目指す学生の意識調査

山王丸靖子, 秋山 隆, 並木英巳子

要 旨

栄養教諭取得希望者を増加させ、熱意ある栄養教諭を育成するために、養成課程で取り組むべき事柄について検討した。対象は2016年度に栄養教諭概論Ⅱを履修した3年生16名（取得希望者13名、非希望者3名）とし、意識調査を実施した。栄養教諭取得を希望した理由では、「管理栄養士以外の資格を取得したい」が最も多い理由であった。負担に感じていることは、授業数の増加（主として5限）であった。理想の栄養教諭像として挙げたのは、①栄養に関する指導、②栄養以外の指導、③児童・生徒への対応ができることであった。実際の栄養教諭に対するイメージとしては「大変そう」との回答が最も多かった。今後は、新入生に対して、栄養教諭制度を正しく認識させ、栄養教諭の役割と重要性を伝えるための取り組みを実施することが必要であると考えられる。

キーワード：栄養教諭, 意識調査

緒 論

2005年4月より開始された栄養教諭制度が10年を超えた。2008年には学校給食法が大きく改正され、教育現場における食をめぐる環境が大きく変化している。埼玉県の私立総合大学である城西大学では、栄養教諭制度開始と同時に履修制度を開設し、大学院修了者に対しては専修免許も授与している。しかし、栄養教諭取得希望者は入学定員100名に対し、毎年1割前後に過ぎない。城西大学において、管理栄養士を目指す学生の中には、入学後に「栄養教諭」資格を初めて知る者もあり、栄養教諭に対する社会的な認知度は未だに十分ではない。

2016年には、総務省から「食育の推進に関する政策評価書」が公表された⁽¹⁾。この報告書において、栄養教諭を中核とした食に関する指導の状況についての調査結果が示されている。その中

で、「栄養教諭の配置率の伸びと小学6年生及び中学3年生の朝食欠食率の伸びとの相関は低い」と結論づけられており、あたかも栄養教諭の存在は食に関する指導への貢献度が低いような印象を受けてしまう。

栄養教諭には、学校給食の管理および、教育活動における食に関する指導の実施が求められる⁽²⁾。学校現場における食育推進の中心的存在として機能するためには、管理栄養士の資質に加え、教員としての強い熱意が求められる。入学当初から教員を目指す教育学部とは異なり、管理栄養士養成課程における栄養教諭資格の取得は主流ではない。そのような状況において自ら栄養教諭として就労したいという高い志を持つ学生を育てるために、管理栄養士養成課程において、どのような取り組みが必要なのか現時点では不明な点が多い。

本研究では、栄養教諭を目指す学生を対象として取得の動機、栄養教諭に対して持つイメージ、

理想像などについてアンケート調査を行った。これらの結果から、管理栄養士・栄養教諭養成課程において今後、取り組むべき事柄について若干の知見が得られたので報告する。

方 法

1. 対象者

2016年11月に城西大学において栄養教諭概論Ⅱ（3年次、後期開講、選択科目、2単位）を履修している16名を対象として無記名自記式質問紙調査を実施した。このうち13名は栄養教諭資格の取得を希望する者（以下、取得希望者）であり、3名は栄養教諭資格の取得を希望しない者（以下、取得非希望者）である。取得希望者13名の性別は男性2名、女性11名であった。取得非希望者は3名とも女性であった。

2. 調査項目

取得希望者13名には次の5つの質問を行った。

①栄養教諭の取得を希望した理由、②栄養教諭科目を履修して負担に感じる点、③小・中学校時代に栄養教諭が学校に配置されていたか、④理想の栄養教諭像、⑤栄養教諭に対するイメージ、である。

取得非希望者3名には次の3つの質問を行った。①栄養教諭概論Ⅱを履修した理由、②栄養教諭概論Ⅱを履修後の栄養教諭資格取得に対する気持ちの変化、③栄養教諭に対して持つイメージである。

3. 倫理的配慮

本研究は、倫理面および個人情報への配慮を盛り込んだ研究計画書を作成し、城西大学生命科学倫理審査委員会の承認を得て実施した（H26-13）。対象者には調査の目的を説明すると共に、回答は無記名式で個人は特定されない事および任

表1 栄養教諭取得希望者の推移

年度	全入学者	栄養教諭希望者
	人数	人数 (%)
2005	109	7 (6.4)
2006	109	12 (11.0)
2007	104	5 (4.8)
2008	103	9 (8.7)
2009	82	7 (8.5)
2010	99	7 (7.1)
2011	103	2 (1.9)
2012	112	13 (11.6)
2013	123	6 (4.9)
2014	115	13 (11.3)

意である事を口頭で説明した。また、回答しなくても単位の取得および成績には影響しない事を口頭で説明した。栄養教諭概論Ⅱの授業開始前に、調査の趣旨を説明しアンケートを実施し、アンケートの回収をもって同意を得たものとみなした。

結果および考察

1. 城西大学における栄養教諭履修者の推移

城西大学における栄養教諭の取得希望者数の推移を表1に示した。入学年度によるバラつきがあり、履修者数の増減に対する影響因子は不明である。なお、2011年度の希望者はそれまでの過去7年間において最も少ない2名であった。少ない理由は明らかではないが、大学に入学して初めて栄養教諭の存在を知る、あるいは城西大学で取得できること知らなかった新入生が存在することと関連すると推測された。そのため2012年度からは、入学後のオリエンテーションで栄養教諭制度の概要および、在学中に管理栄養士の受験資格に加えて取得できることを説明することとした。説明にかかる時間はおよそ15分である。2012年度からは、増加したものの大幅な増加にはつながらず、

栄養教諭を目指す学生の意識調査

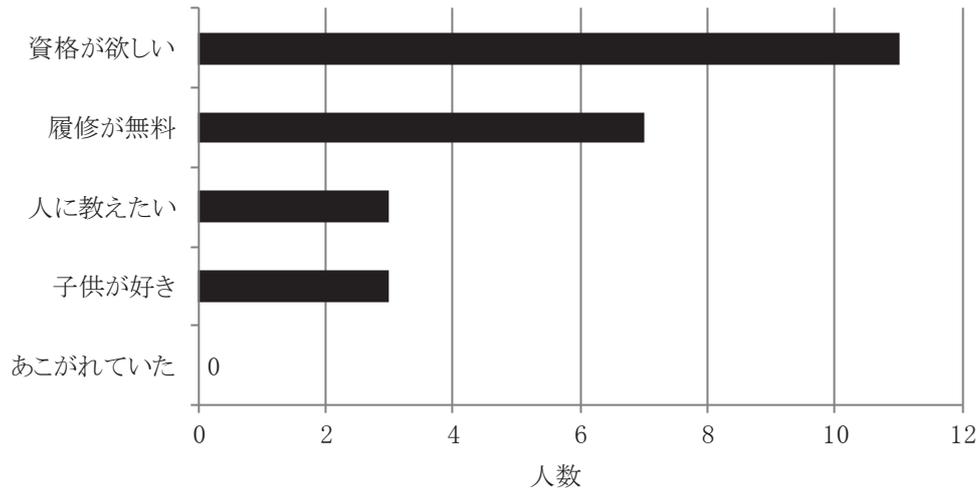


図1 栄養教諭の資格取得を希望する理由

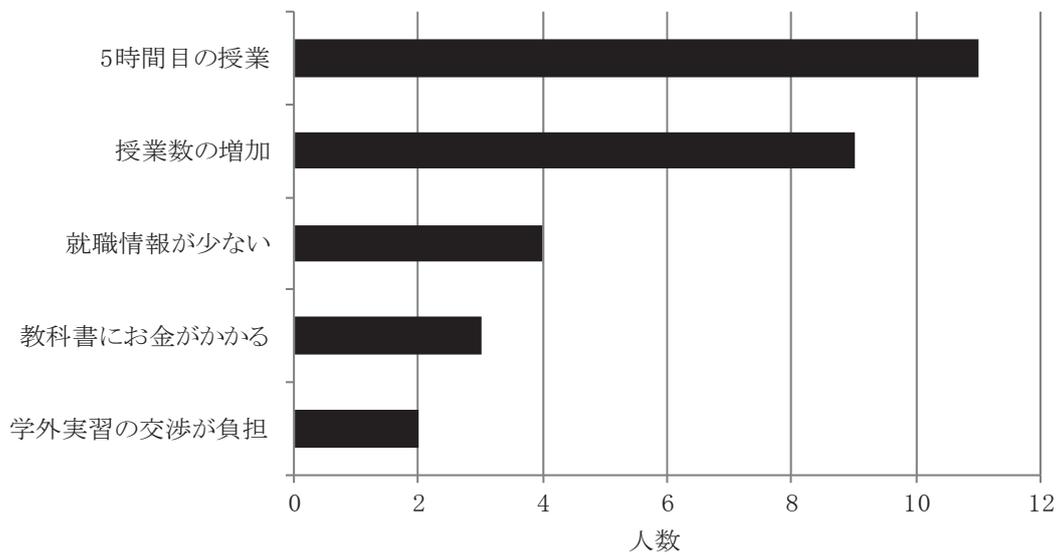


図2 栄養教諭取得について負担に感じる事

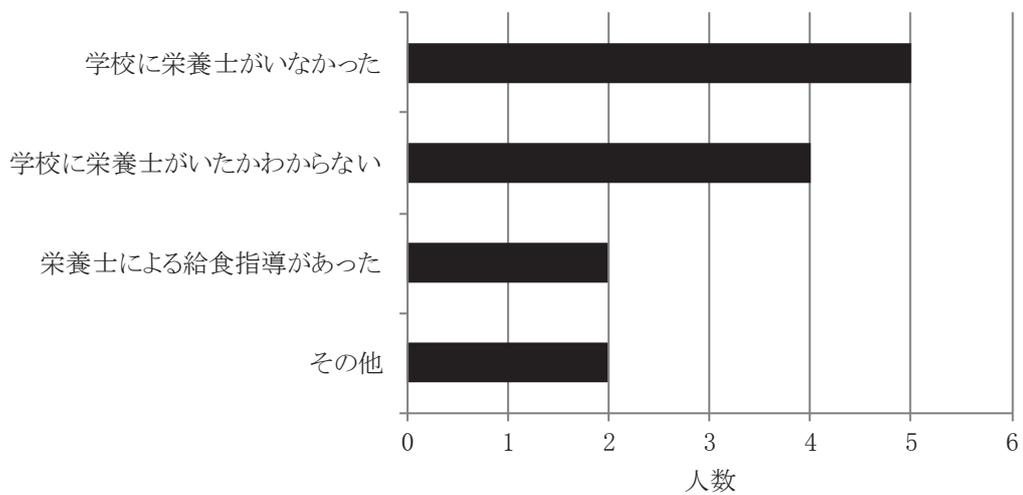


図3 学校栄養士との関わり

入学年度によるばらつきが見られる。

また少数であるが、栄養教諭取得を希望していない学生が栄養教諭概論ⅠあるいはⅡを選択履修する年度もある。今回の調査では、その理由について、3名の非希望者を対象とした調査項目を設けた。

2. 栄養教諭資格の取得を希望する理由

栄養教諭資格の取得を希望する理由について、取得希望者を対象とした調査結果を図1に示した(複数回答)。最も多かった回答は「資格が欲しい(11名)」であった。本調査の対象者は管理栄養士資格の取得を目指して大学に入学しており、あらゆる資格取得に対する熱意は強いことが推測された。次に多かった理由としては「履修が無料」であった。これらを考え合わせると、余分に授業料を払わずに資格が取れるのが大きな理由となっている。その一方で、栄養教諭に「あこがれていた」と回答した者はおらず、「子供が好き」「人に教えた」という回答は13名中、それぞれ3名であった。入学当初から教師を目指して入学する教育学部とは異なり、管理栄養士を目指して入学する対象者においては、「人に教えた」との熱意を強くは持っていないと推測された。さらには、今回の調査対象者が小学生であった10年前には、栄養教諭数が少なく、栄養教諭の存在自体を知らなかった可能性も考えられる。対象者の出身地は調査しておらず、詳細は不明であるが、栄養教諭の配置数は、自治体により異なっており、配置数が最も少ない地域では栄養教諭に出会った確率はかなり低い⁽³⁾。これらの理由から、栄養教諭そのものをほとんど知らないまま管理栄養士養成課程に入学し、単純に「資格」が欲しいとの理由から、栄養教諭の資格取得を希望している現状が推測された。

3. 栄養教諭科目を履修して負担に感じる事

取得希望者を対象として栄養教諭科目の履修について負担に感じることを質問した。結果は図2に示した(複数回答)。回答の中で最も多かったのは「5時限目の増加」であり、次にはそれと同意の「授業数の増加」が挙げられた。管理栄養士養成課程では、資格取得のための必修科目が多く、それに加えての科目増加が最も負担に感じられている現状が示唆された。その他として挙げられた自由意見は「試験数が増える」、「土曜日に教職科目が入ると往復5時間を通うのがつらい」、「教職科目の配当時間に対する配慮がない」などの、大学の履修制度に関する事柄であった。教職に関する科目は5時限目(16時50分～18時20分)あるいは、土曜日に配当されていることが多く、そのような現状を負担として感じていることが示された。埼玉県西部に位置する城西大学では、近隣に下宿する学生以外は片道2時間以上をかけて埼玉県内、東京、群馬、栃木などから通学している者が多い。そのため、教職科目だけを受講するために土曜日に通学することおよび、帰宅が遅くなることへの負担が挙げられたと考えられる。なお、調査対象が3年生であることから、具体的に学外実習の交渉までには至っておらず、就職活動も開始していないため、それらに関する回答数は少なかった。

管理栄養士養成課程では、必修科目が多く、その上での科目数増加は現実的にかんがりの負担になっている。なお、正確な人数は不明であるが、1年次、2年次の間に、栄養教諭の資格取得を断念する学生が数名存在していることも、現状の反映であると考えられる。

4. 学校栄養職員との関わり

取得希望者13名を対象として対象者が通学した小学校に学校栄養職員(以下、栄養士)が在籍していたか、その栄養士との関わりについて質問し

表2 理想の栄養教諭像

①栄養に関する指導（8意見）
<ul style="list-style-type: none"> ◆栄養に関することを何でも答えられる。 ◆栄養について大切に思っている。 ◆人が生きる源は食で、食の管理ができていないと病気などにかかりやすくなりQOLが低下する。 そのため、子供たちの将来を考えて、良い食生活を習慣化させる教え方ができる。 ◆食材に関しての知識と実際を良く知り、日々の生活と関連づけて説明できる。 ◆学校全体（主に子供たち）の事を考えて、栄養のことをいろいろな視点から理解して実践できるよう努力する。 ◆児童のことを考えられ、栄養について詳しく教えられる。 ◆食育を踏まえて給食の大切さを伝えられる。 ◆子供に食べ物について興味を持たせられる。
②栄養以外の指導（4意見）
<ul style="list-style-type: none"> ◆実践しやすいことを教えてくれる。 ◆分かりやすく楽しく指導して、児童・生徒の健康や食生活を考えられる。 ◆栄養のことだけでなく、様々な教科を合わせて教え、生徒にいろいろなことに興味を持たせられる。 ◆道徳や学級活動が行えて、担任を持てる。
③児童・生徒への対応（5意見）
<ul style="list-style-type: none"> ◆子供に好かれる。 ◆自然に分からないことを聞ける。 ◆児童一人一人を見る事ができ、興味・関心を持ってもらえる授業ができる。 ◆児童や生徒に思いやりがある。 ◆栄養以外にも、子供が迷ったらきちんと向き合っ対応できる。

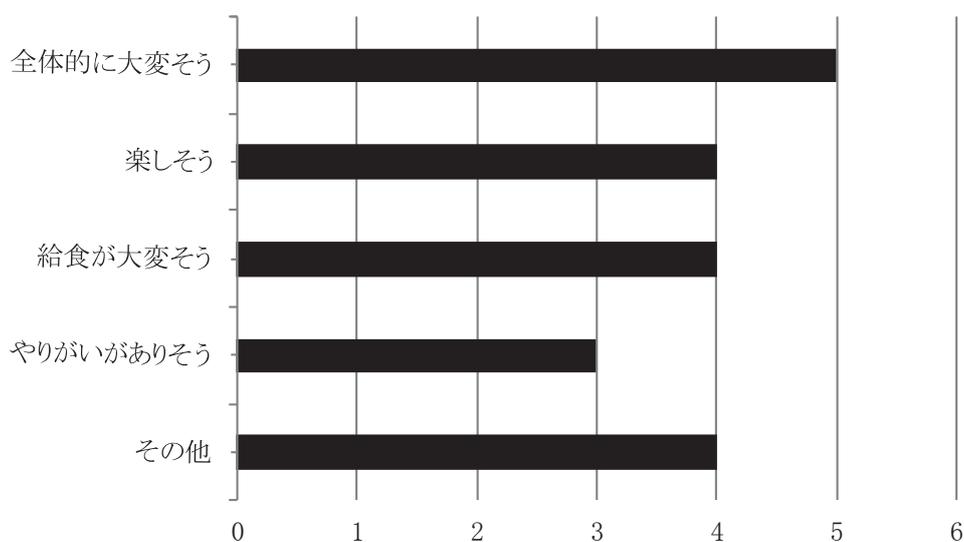


図4 栄養教諭に対するイメージ

た。結果は図3に示した。本質問において、栄養教諭ではなく栄養士（学校栄養職員）として質問した理由は、対象者が小学4～5年生であった10年前には栄養教諭はほとんど在籍していなかったと推測したことによる。「学校に栄養士がいなかった」、あるいは「いたか分からない」との回答が13名中9名であった。すなわち、栄養士との関わりは非常に少なく、その存在自体が目立たなかったと考えられる。栄養教諭が在籍しておらず、栄養士であれば、食に関する授業は行われぬ。なお、「在籍しており指導があった」と回答したのは2名だった。具体的な指導内容を質問してないため、詳細は不明であるが、給食時の指導、巡回指導などではないかと推測される。その他の回答は、「給食センターの栄養士が時々指導をしていた」「給食室にいて配膳時に話をしたことがあるが、指導はなかった」であった。栄養教諭の資格を取得する理由（図1）で、「栄養教諭にあこがれていた」の回答者はいなかったことを挙げたが、小学校において栄養教諭どころか栄養士の存在を知らない現状では、あこがれることはできない。今後は、栄養教諭数が増加し教育活動範囲を広げ、児童・生徒の認知程度を高める必要がある。

5. 理想の栄養教諭像

「理想の栄養教諭」について取得希望者13人に自由回答形式で質問した。得られた回答を①栄養に関する指導、②栄養以外の指導、③児童・生徒への対応として3つに分類した結果を表2に示した。

栄養に関する指導力を持つとともに、栄養以外に関する指導力を併せ持ち、さらには児童・生徒への対応ができるのが「理想の栄養教諭」として考えられていた。栄養の指導の中には、給食指導をはじめとした食育ができることが挙げられた。1名ではあるが「担任が持てること」という回答が

あり、教諭として積極的に教育に関わりたい姿勢が見られた。

栄養教諭の職務内容は、「食に関する指導と学校給食の管理を一体のものとし、二つを車の両輪のようにバランスよく進めるもの」とされている⁽⁴⁾。2005年に制定された食育基本法の前文にも「食育を、生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきものと位置付ける」と明記されている。さらには「様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択できる力を習得し、健全な食生活を実践できる人間を育てる食育を推進することが求められている」とも示されている。食育は学校教育の基礎であり、全国すべての義務教育学校へ栄養教諭の配置が望まれる。

6. 栄養教諭に対するイメージ

取得希望者13人と非希望者3人の合計16名を対象として「栄養教諭に対するイメージ」を質問した（複数回答）。結果を図4に示した。最も回答数が多かったのは「全体的に大変そう（5名）」であった。「給食が大変そう（4名）」「楽しそう（4名）」も次に回答者が多かった。久木野らの栄養教諭取得学生を対象とした調査でも同様に「給食管理が大変」との回答が挙がっており⁽⁵⁾、本調査でも同様の傾向が認められた。学校に1名しか配置されない栄養教諭について、「大変そう」とのイメージを持つのは当然ではあるが、「やりがいがありそう」とのイメージを増加することが望ましい。

非希望者3名は全員「やりがいがありそう」「楽しそう」と回答した。非希望者は、栄養教諭として就労する自分を想像しないことから、これらの回答を選択したのではないかと考えられた。その他の回答内容としては、「学校には一人しかいない」「他の先生から差別を受けている」「就職先が少ない」「イメージはない」などがあがった。こ

これらのイメージはすべて、対象者が実際の栄養教諭に出会っていないことに起因すると考えられる。

7. 非希望者における栄養教諭概論Ⅱを履修した理由と履修後の気持ちの変化

栄養教諭の資格取得非希望者が栄養教諭概論Ⅱを履修した理由について、3名を対象として質問した（複数回答）。結果は表に示していないが以下の通りである。「科目名から興味を持った（2名）」「先輩から内容を聞いて興味を持った（1名）」「人前での発表の練習になる（1名）」が理由として挙げられた。先輩から内容を聞いて履修するという回答については、他の選択科目についても見られる現象であり、口コミは、科目履修について比較的重要な要素であると考えられる。3年次に開講される栄養教諭概論Ⅰ、Ⅱは栄養教諭の資格取得を希望しない者であっても履修できる選択科目である。しかし、その内容は栄養教諭に関する内容に特化している。今後、非希望者の履修が大幅に増加した場合には、科目担当教員の負担が増加しかねない。城西大学における栄養教諭概論Ⅱでは、4年次の栄養教育実習（学外）を念頭に、学習指導案作成を個人対応で行っている。今後、もし履修希望者が大幅に増加した場合には、指導案作成および模擬授業はチーム・ティーチングを模した形でのグループ指導を視野に入れるなどの方策が必要になると考えられる。

また、履修後の気持ちの変化について自由記述で質問したところ、「取得を希望しておけばよかった」「栄養教諭の仕事に興味を持った」が挙げられた。また、履修して「発表の練習になった」との回答も1名であるが見られた。

まとめ

表3に文部科学省健康教育・食育課統計による

表3 栄養教諭配置数の推移（全国）

	栄養教諭数（人）
2005年度	34
2006年度	359
2007年度	986
2008年度	1,897
2009年度	2,663
2010年度	3,379
2011年度	3,853
2012年度	4,262
2013年度	4,624
2014年度	5,023
2015年度	5,356
2016年度	5,766

2005年から2016年までの栄養教諭採用数の推移を示した⁽⁶⁾。2016年では全国で合計5766人の栄養教諭が配置されている。合計配置用数は着実に増加しており、望ましい状況といえる。しかし、栄養教諭の中には学校栄養職員からの任用替えによる配置転換が相当数含まれることから⁽⁵⁾、養成課程卒業後の初任採用は、栄養教諭の中では少ないと推測される⁽⁷⁾。なお、各自治体において配置数の差は大きく、自治体により取り組みの差があり、その格差は大きい^{(2)・(8)}。また2013年の大阪府の調査から、栄養教諭の構成年齢はばらついており、40歳以上が多いことが報告されている⁽⁹⁾。この年齢構成は、その他の自治体においても同様の傾向を示すことが推測される。新卒者の採用が低いことも、本調査の対象者が回答したように「就職情報がない」「就職がない」などのイメージにつながっていると考えられる。

栄養教諭の勤務場所は、4割前後が学校給食センター等の調理場に勤務し、給食管理を主たる業務として兼務していることが報告されている⁽¹⁾。調理場勤務においては、学校勤務の栄養教諭よりも、時間的、物理的に大きな制約を受けると考え

られる。同調査からも、「当省のアンケート調査結果では、学校給食共同調理場（以下「共同調理場」という。）の給食管理を兼務していない専任の栄養教諭が配置されている小学校では、配置されていない小学校よりも各教科等の食に関する指導時間が長い状況がみられた。また、専任の栄養教諭が配置されている小学校では、配置されていない小学校に比べて「学校全体で食育に取り組む体制づくりが進んだ」とする回答が多かった。」と報告されている。さらに「栄養教諭が学校における食育の中心的な役割を果たすようになった。」「食に関する指導に対する教職員の理解が進んだ。」などの質問に対し、「変化が認められる。」なども報告されており、専任の栄養教諭が配置されている学校において成果が大きいことは明らかである。

制度開始から10年以上が経過してもなお、栄養教諭の活動に対する理解度は低く、「食育推進指定校」等以外では、栄養教諭の積極性に食育が委ねられている現状がある⁽⁷⁾。そのため、食育について、栄養教諭以外の教職員の理解が進むとともに、推進力になることが期待される^{(9)・(10)}。宇佐美ら⁽¹¹⁾は、中学校の家庭科教員が小学校の栄養教諭は多忙であり連携が難しいと認識していると報告している。このような現状からも、全国の小・中学校に栄養教諭を配置し、すべての教員と連携して食育を進める体制の整備が望まれる。

今回のアンケート調査における対象者は、栄養教諭の配置が少ない時代に小・中学生であった。そのため、大学パンフレットに栄養教諭資格が取得できる旨が記載はされているものの、「栄養教諭」に出会ったこともなく、その存在を強い認識はなかったものと考えられる。管理栄養士養成課程に、将来は管理栄養士として、医療現場、食品会社、福祉関係等で働くことを考えて入学している学生がほとんどである。そのような学生に、突然「栄養教諭」が取得できる、と説明しても熱意

を持たせることは困難であると考えられる。特に現在の社会・経済状態を考え合わせると、栄養教諭として就労する意欲よりも、管理栄養士以外の資格が取得できると考えて履修する気持ちが強くなる。しかしながら、今後の城西大学管理栄養士養成課程への入学者は、全国的に栄養教諭数の増加に伴い（表3）、食育指導を受けている可能性も高まっている。そのような現状から、栄養教諭になりたいと熱意を持つ学生が増えることが期待される。

なお、入学直後には栄養教諭の取得を希望しなかった学生が2年に進級した後、改めて「栄養教諭を取得したい」と思い直しても、城西大学の履修制度からはかなり困難である。それは管理栄養士養成課程のカリキュラムが多いことに起因している。現状では、入学時ガイダンスでの15分の説明では不十分であると考えられる⁽⁵⁾。今後は、栄養教諭制度について正しく認識させること⁽¹²⁾、すなわち栄養教諭の役割がいかに重要であり、必要な資格であるかを伝えなければならない⁽¹³⁾。学童期で食について学んだ経験は、成人後の食習慣につながるということが報告されている⁽¹⁴⁾。教育現場における栄養教諭の実践活動は、将来的には国民の健康増進にまで貢献できる重要な役割である。養成課程としては、改善可能な点に早急に取り組み、やる気と熱意にあふれた栄養教諭の養成を進める責務がある。

〔参考文献〕

- (1) 総務省：食育の推進に関する政策評価書
(2015).http://www.soumu.go.jp/main_content/000382445.pdf (平成29年12月)
- (2) 松田素行：食育に関する特別活動の実践と課題, 日本特別活動学会紀要, 21, 19-23 (2013)
- (3) 山本裕詞：食育行政における栄養教諭配置計画の比較検討, 郡山女子大学紀要, 50, 111-124 (2014)
- (4) 小栗公子：学校における「食に関する指導」をどのように進めるか, 栄養教諭創刊号, (社)全国学校栄養士協議会編, 43-45 (2005)
- (5) 久木野陸, 小川彩彰子：学生の意識調査からみた本学の栄養教諭養成における課題, 活水論文集, 60, 1-7 (2017)
- (6) 文部科学省：栄養教諭の配置状況 http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/syokuiku/08040314.htm
(平成29年12月)
- (7) 岡邑衛：特別活動における栄養教諭の役割と課題, 甲子園大学紀要, 43, 17-25 (2016)
- (8) 秋永優子, 伊藤美穂, 宇都宮由佳, 江原絢子, 糟須海圭子：学校給食を通じた和食文化の保護・継承調査, 学校給食, 8, 31-43 (2016)
- (9) 井奥加奈, その他：2009年と2013年の食育調査にみる小学校に勤務する教員の役割分担意識と子供の食生活における問題意識の変化, 大阪教育大紀要, 63, 5-16 (2014)
- (10) 神戸美恵子, 他：栄養教諭の職務の現状と課題, 高崎健康福祉大学紀要, 11, 47-6. (2012)
- (11) 宇佐美美佳：中学校における食育推進の課題, 学校保健研究 56, 129-137 (2014)
- (12) 大橋伸次：栄養教諭志願者の意識について, 国際学院埼玉短期大学紀要 27, 127-130 (2006)
- (13) 橋本まさ子, 石井広二, 中島君恵, 松岡千枝子：桐生短期大学における栄養教諭養成課程の現状とその課題, 桐生短期大学紀要 18, (2007)
- (14) Fisk C.M., Crozier S.R. and Inskip H.M.: Influences on the quality of young children's diets: the importance of maternal food choices. Br J. Nutr. 105, 287-296 (2011)

The Perception of Registered Dietitian Training Course Students on Being a Nutrition Teacher

Yasuko Sannomaru, Takashi Akiyama, Emiko Namiki

Abstract

To educate an enthusiastic nutrition teacher, we aimed to investigate an important matter which should be explore in a registered dietitian training course. We investigated the perception of the students who want to obtain the license of a nutrition teacher in Josai University on being a nutrition teacher. Subjects were 16 third-year students (13 teaching course students and 3 non-teaching course students), who took the introductory course for nutrition teacher in the second semester, 2016. The principal reason of taking license of nutrition teacher is that they wanted to obtain another qualification in addition to that of registered dietitian. Students feel burdening of the increasing number of classes (mainly those held in the fifth period). The functions of nutrition teacher were thought as follows: (1) guide the nutrition students, (2) conduct tutorial to students other than the nutrition students, (3) take care of children and students. Students have perception that nutrition teachers have heavy workload. In future, we should properly introduce the nutrition teacher system to the freshmen of registered dietitian training course. Simultaneously, we also should teach them on the importance and necessity of nutrition teacher.

Key words: Nutrition Teacher, Registerd Dietitian